

平成21年度
水源地域対策アドバイザー派遣制度報告書

1. 市町村概要

(1) 市町村名

福岡県京都郡みやこ町

(2) 派遣対象地域

伊良原ダム周辺地域

(3) 町の概要

みやこ町は、福岡県の北東部に位置し、平成18年3月20日に京都郡犀川町、勝山町、豊津町の3町が合併し誕生した。町の北東は行橋市に接し、北は北九州市、西は筑豊地域、南は大分県に接し、東西13.2km、南東28.4kmのクサビ型をした地形であり、総面積151.28km²、人口22,343人（平成21年12月末）の、農業が盛んな、歴史・文化・自然に富み、春の桜、初夏の花しょうぶ、秋の紅葉など花と緑豊かな町である。



・みやこ町概要 (H21.12末)

世帯数	8,542世帯
人口	22,343人
高齢者人口	6,541人 (29.2%)

・水源地域概要 (下伊良原、上伊良原)

世帯数	134世帯
人口	323人
高齢者人口	170人 (52.6%)

(4) 水源地域の現状と課題

水源地域においては、ダム建設問題で40年余り、インフラ整備の空白期間が続いたため、地域基盤整備が立ち遅れている。当地域内には就業の場がなく、若者が就業を求めて流出し、地域の過疎化と高齢化が進行している。また、公共交通機関の利便性が悪く、通勤通学、高齢者の通院、買い物などに支障をきたしている。

水源地域の基幹産業は、農林業であるが、高齢化と担い手不足による田畑、山林の管理を今後どう進めるか、大きな問題となってきた。

現在、最上流域の帆柱地区において、特産組合、開拓組合でお茶、味噌、味噌漬けなどの製造販売が細々と行われ、昨年からは伊良原地域においても、葉わさびの栽培を始めている。これまで個別経営で進めてきた農業を集落営農組織の設立などを含め、地域の農業を検討する時期にきていると思われる。

林業についても、農業との兼業が多く、農業と同じく就業者の高齢化と木材価格の低迷で山林の管理ができていない状況である。

これらの状況から、今後の農林業について、新規農林産物の開発や観光に結びつけた新しい農林業、また、就業機会や高齢者の生きがい対策などが、現在の課題となっている。

(5) 希望するアドバイスの内容

水源地域である、旧伊良原村地区は少子高齢化にともなう人口の減少による過疎化が進んでいるなか、ダム建設後の伊良原のあるべき姿を求めて、多くのダム建設先例地に学び、伊良原の将来を真剣に考え取り組んでいる人達と意見の交換や検討を重ねてきた中で、豊かな水と緑に抱かれ、純朴で心豊かに生活できる、「自然との共生の中で、うるおいとやすらぎと活力ある故郷の再生」を今後の取り組み目標として位置付け、次の項目についてアドバイスを希望した。

伝統文化の保存と未来への伝承について

- ・住民参加による地域交流

資源の発掘・活用について

- ・住民参加による地域資源の発掘

産品開発・育成について

- ・新たな地域産品づくり
- ・地元産品の地産地消

地域の体験・開発について

- ・地域の自然体験
- ・地域の歴史・文化体験
- ・地域の農林業体験

2. 平成21年度アドバイザー派遣制度（第1回派遣）

◆ 1～2日目（事前検討会）

日 時：平成21年10月28～29日

場 所：みやこ町本庁 庁議室

内 容：水源地域概要説明、アドバイス希望内容について説明

出席者：斉藤章一アドバイザー（(財)都市農村漁村交流活性化機構 専務理事）

【国土交通省】

鵜飼宣行（国土交通省 水源地域対策課 計画係長）

【みやこ町】

中村紘一（副町長）

山本倫明（総務課長）、村上重範（企画調整課長）、吉永秀信（財政課長）、

山下茂治（農政課長）、奥田和明（伊良原ダム対策課長）、

立花博美（伊良原ダム対策課長補佐）

【福岡県】

井上幸春（福岡県議会議員）

武末保彦（水資源対策課長補佐） 灘波英次（水資源対策課振興係長）、

岡崎陽好（水資源対策課振興係主任技師）



□会議内容

山下農政課長

○町内の農産物直売所の現状について

- ・町内には犀川、豊津にそれぞれ一箇所の直売所がある。
- ・集客数は年間で犀川が24万人、豊津が48万人。
- ・客単価は1,200円/人。
- ・その他、農協の直売所を合わせると、100万人の集客がある。

○食育について

- ・平成22年度の旬産カレンダーを現在作っている。
- ・これを食育のひとつとして、みやこ町の小中学校に配る予定。

井上県議会議員

○ITについて

- ・愛媛県内子町の道の駅ではバーコードで品物管理をしている。
- ・商品の在庫を家に居るだけで確認ができるので、商品補充が迅速に行われている。
- ・みやこ町の発展のためには、ITレベルを上げることも大切だと考えている。

○地元住民について

- ・この地域の宿泊施設は既存の蛇淵キャンプ場と計画中の森林公園がある。
- ・森林公園の宿泊施設は、地元住民の要望である。
- ・この2施設が競合してしまう不安がある（共倒れ）。

○地域イベントについて

- ・先週、地元の町会議員がリーダーとなってイベントが開催された。
- ・2日間で約1,000名の集客があった。
- ・ここを訪れた子供たちが飛び入りで餅つきをして、ほのぼのとした雰囲気であった。

○現在の地域PRについて

- ・みやこ町の隣の行橋市は「蟹」や「ふぐ」を美味しく安く食べることができるが、PRをしていない。
- ・みやこ町は山の幸が豊富で、行橋市は海の幸が豊富な地域であるが、PRが下手なので、PR分野もご助言頂きたい。

○ダム関連振興事業について

- ・「伊良とぴあ」で水車を造って、そこで挽いた蕎麦粉で、蕎麦を提供し、森林公園では田舎弁当を作って森林浴に来た方に販売してはどうかと思っている。

○有害鳥獣（猪）対策

- ・みやこ町は今年度、猪の解体場を建設する。
- ・解体された猪肉は、直売所などに並ぶようになる。
- ・この地域に猪牧場を造り、そこで有料で猟を行えるような施設ができないかと思っている。

【斉藤アドバイザーからの意見】

「地域活性化に向けて」

- ・各種（水特）施設を活かすためには、利用者のニーズを分析する必要がある。
- ・各種（水特）施設を個々別々に宣伝しても、集客は期待できない。
- ・利用者はいろいろな施設を短期間に楽しみたいと考えている。
- ・みやこ町の直売所は集客があるため、そこを町の拠点として観光情報発信を行う手法がある。
- ・森林公園もスペースがあるので、町の観光情報発信の拠点とする手法もある。
- ・最近では道の駅が観光情報発信の拠点となっている。
- ・今までのような地元中心に物事を運ぶのではなく、利用者のニーズに対応しながら発展させていく手法が好ましい。
- ・どうやって利用者のニーズを吸い上げるのかを考えていかななくてはならない。
- ・利用者のニーズに合わせた仕掛けがポイントとなってくる。
- ・ひとつの施設を造ることで、他の施設も生きていくような連携が好ましい。
- ・岩手県遠野市の道の駅は、風光明媚な場所であり、景観を楽しめる無料の休憩所を造った。
- ・これにより、施設の利用客が増え収益にも繋がった。
- ・そこで生活する方の利便性を考えた施設と、外からの人（利用者）に来てもらいたいといった施設の考え方は違う。
- ・住民が利用する施設は、徹底的に住民のニーズを吸い上げていく必要があり、外からの人（利用者）が利用する施設は、外からの人のニーズを吸い上げる必要がある。
- ・地域の得意な点は自信を持って提供し、なおかつ利用者のニーズにも合わせる手法が好ましいが、利用者のニーズに合わせ過ぎるのも問題である。（地域の色が無くなる）
- ・みやこ町は、すばらしい自然・文化・歴史があるので、今ある施設計画に沿って施設を整備し、それを外部との交流にどのように活かしていくのかを考える手法が良いのではないか。

「ITの活用について」

- ・私たちは、直売所のネットワークを進めているが、直売所のIT化がひとつの問題となっている。
 - ① 生産者がリアルタイムで補充できるシステム
 - ② 直売所内での売り上げ管理システム
 - ③ 直売所に並んでいる農産物情報を提供するシステム
- ・農産物情報を提供する手法として、直売所内のテレビで生産状況、特徴、生産者のコメントなどを流している場所もあり、消費者は「食の安心」に最近は関心があるので、評判がとても良い。

- ・オンラインの監視カメラを利用することで、生産者は売り上げ状況が分かり、消費者は季節の農産物が店頭で並んでいるのかなどといった旬情報が得られ、直売所は防犯用として利用することができる。
- ・最近では、遠方への宅配依頼も多くなってきていると聞いている。
- ・子供の体験学習は田植えだけ、稲刈りだけといった短期体験しかなかったが、田植え後の稲の成長をインターネットで見られるようなことも考えている。
- ・軽井沢では有害鳥獣対策にGPSを利用し、鳥獣の管理を行っている。
- ・農林業関係で進んでいるところは、ITの活用をしている。
- ・ITの活用は、これからの地域にとって重要な課題になるものと思う。
- ・ホームページに誰がアクセスしたか分かるようにしているところがある。
- ・アクセスした人の地域が分かれば、利用者のニーズを把握するきっかけとなる。
- ・今は利用者が選択する時代なので、こういった仕掛けが重要となってくる。
- ・地元住民は地元視点なので、地域全体的な視点で考え、助け合うような組織が必要。

「都市部の現状について」

- ・都会のニーズのひとつとして、ファッション性とデザイン力がある。
- ・良い例は「スイーツ業界」である。
- ・商品や売り方まで、全てにおいてファッション性を重視している。
- ・都市部の女性は、ファッション性やデザイン力に敏感である。
- ・田舎にも、お洒落なものがあれば都市部の女性客を確保できる。
- ・今の世界的戦略のコンセプトには5つのポイントがある。
 - ① 質を良くする（景観など）
 - ② 生活の質を良くする
 - ③ 共同体を維持・復元していく
 - ④ 都市と農村漁村との交流
 - ⑤ 地域のブランド化
- ・基本は地元が持っている「力」を発見し引き出す。
- ・それを外部に向けて発信していき、外部からの意見を聞き形にしていく。
- ・みやこ町もこれらを一つ一つクリアしていかななくてはならない。
- ・交流については、不特定多数ではなく特定多数を対象にすべきである。
- ・みやこ町が好きな人を核として交流を進めていく手法により付加価値を高めることが出来る。
- ・私に関係している事例で、マンション管理組合を対象に交流しているところがある。
- ・マンション住民の方々に田植えと稲刈りをしてもらって、収穫した米を1俵3万円で購入してもらおう。
- ・マンション側は、田植えや稲刈りの時期以外にも、その地域のイベントに参加するよう

になる。

- ・マンション側は、マンションでのバザー等で、野菜等の販売を依頼してくる。
- ・稲作で獲得した交流者が、イベント人口増・野菜の販売促進などの付加価値を生み出す。
- ・不特定多数であれば、1回のみ交流になりがちである。

「グリーン・ツーリズムについて」

- ・交流の手法としてグリーン・ツーリズムがある。
- ・今後はグリーン・ツーリズム+αが大切になってくる。
- ・地域に来てもらった人達に、何かを（農業・林業など）してもらって、地域に貢献してもらうような仕掛けである。
- ・特に間伐材などはあまり活用されていないようなので、どうやったら活用できるか考えなくてはならない。
- ・熊本県阿蘇の野焼きも畜産農家の減少により、野焼きが出来ないといった状況であった。
- ・今はNPOが野焼きをしているところがあり、交流を通じて環境問題や地域労働に貢献している。
- ・グリーン・ツーリズムを利用し、交流人口を増やすだけではなく、来た人に楽しんでもらい、地元の発展に貢献してもらう仕掛けを作ると地域の活性化の形が変わってくる。
- ・グリーン・ツーリズムには、黙っていても人が集まるようなハニーポットがある。
- ・今後のみやこ町にもハニーポットが必要であり、町全体として大きなハニーポットを作る必要がある。
- ・これは、個々バラバラではできないので、みんなで力を合わせてやっていかなくてはならない。
- ・そのためにも「地域みんなで地域の活性化をする」といった意識改革が必要で、そこにはリーダーとなる人間が必要であり、基本である。
- ・現在のグリーン・ツーリズムは点でしか楽しめない。（直売所で農産物を買うだけとか、民宿に泊まるだけとか、農家レストランで食べるだけなど..）
- ・地域を「まるごと」楽しめるプランを作れば、地域で使われるお金も増える。
- ・それと、都会に住んでいる人の目と田舎の人達目で旅行商品を作ることが重要となる。
- ・できれば、地域をまんべんなく回れるような仕組みが欲しい。
- ・みやこ町を「まるごと」楽しめるプランは、「まちむら交流きこう」とみやこ町が協力すれば作れる。
- ・せっかくのダム関連事業なので、経済効果があるようなプランを作るべきである。
- ・交流の形態も戦略性をもって検討しなくてはならない。
- ・せっかく地域に客が来るなら、地域でお金も使ってもらって、なおかつ地元貢献（農業・林業の人手など）してもらえそうな仕掛けが必要である。

◆質疑

「冬季のキャンプ場について」

【立花課長補佐】

- ・今年、年中利用できる蛇淵キャンプをオープンしたが、冬季の客確保に向けてのアイデアがあれば教えていただきたい。

【斉藤アドバイザー】

- ・北海道のオホーツク周辺で「大雪原をひとりじめ」プロジェクトを始めた。
- ・このプロジェクトは、雪で耕作ができない田畑で雪だるま作るなり、雪合戦するなり、好きに使ってくださいといった内容である。
- ・地元住民達は、負の存在であった雪を利用することで観光客の獲得に繋がった。
- ・利用者のニーズを把握し、みやこ町の冬の魅力を活かす。
- ・交流で重要なことは、利用者のニーズである。

【井上議員】

- ・役場付近で、1cm積雪すれば、帆柱地域（蛇淵）では10cm積雪する。

【斉藤アドバイザー】

- ・冬の白川郷は雪景色をライトアップしている。
- ・面白い風景なので写真家や画家が集まっている。
- ・岩手県ではホルスタインの牧場に羊を入れている。
- ・ここも画になる風景なので、写真家や画家が集まっている。

◇その他

【鶴飼係長】

- ・昨年から色々なダムを回っているが、地域活性化に成功している場所は、地元の方がやる気を持って率先してやっているようなところである。
- ・まずは、そのような人材の発掘等を行った方が良い。

【八木准教授】

- ・この地域の高齢化率は高いが、地域内には予想以上に子供たちが多いと感じた。
- ・この子供たちは、すぐに地域から出て行くような年齢ではないので、地域の可能性は、まだあると感じている。
- ・夏場は地域外の子供達が川遊びに来ている。
- ・ここに来ている子供たちは魅力を感じているから、この地域に来ている。
- ・この地域は、幅広い年齢層に訴える環境がある。

- 大学のゼミの生徒たちが、蛇淵キャンプ場に魅力を感じ夏休みに遊びに来たと聞いている。
- 生徒たちは、都市部では経験できない（川で遊ぶ）事に魅力を感じている。
- 川に隣接したキャンプ場も、魅力のひとつのようだ。

◆ 2日目（現地視察）

日 時：平成21年10月29日

場 所：農産物直売所(国府の郷、よってこ四季犀館)、豊前国分寺、犀川駅、代替地、永沼家住宅、帆柱特産組合、蛇淵の滝（キャンプ場）、荒廃林

出席者：齊藤章一アドバイザー（(財)都市農村漁村交流活性化機構 専務理事）

【国土交通省】

鵜飼宣行（国土交通省 水源地域対策課 計画係長）

【みやこ町】

山本倫明（総務課長）、村上重範（企画調整課長）、吉永秀信（財政課長）、

山下茂治（農政課長）、奥田和明（伊良原ダム対策課長）、

立花博美（伊良原ダム対策課長補佐）

【みやこ町関係者】

八木健太郎（西日本工業大学デザイン学部建築学科 准教授）

【福岡県】

灘波英次（水資源対策課振興係長）、岡崎陽好（水資源対策課主任技師）

◇豊前国分寺

◇農産物直売所（よってこ四季犀館）



◇永沼家住宅



◇帆柱特産組合



◇蛇淵の滝 (キャンプ場)



◇葉わさび畑



◆ 3日目 (調査取りまとめ)

日 時：平成21年10月30日 (金)

場 所：みやこ町本庁 庁議室

内 容：第1回派遣についてのまとめ及び次回の会議日程について

出席者：齋藤章一アドバイザー ((財)都市農村漁村交流活性化機構 専務理事)

【国土交通省】

鵜飼宣行 (国土交通省 水資源地域対策課 計画係長)

【みやこ町】

村上重範 (企画調整課長) 山下茂治 (農政課長)

奥田和明 (伊良原ダム対策課長)、立花博美 (伊良原ダム対策課長補佐)

【福岡県】

灘波英次 (水資源対策課振興係長)、岡崎陽好 (水資源対策課主任技師)

□会議内容

【齋藤アドバイザーからの意見】

- ・みやこ町には豊富な資源が多くあるが、バラバラである。

- ・水源地域振興事業をチャンスと捉え、共通の考えであるコンセンサスを作り、新しい発展に向けて動き出す必要がある。
- ・時代が変化していることを捉える。《地球的に考え、地域的に行動する》
- ・資源の掘り起こし→地域政策（新しい変化、地球的、地域的）を考えていく。
- ・3つのポイントがある
 - ① 新しい時代には、光と影ある。影は少子高齢化・後継者不足、光は食料問題。
 - ② 都市の人が田舎に目を向けてくれている。地域の対応力が問われている。
 - ③ みやこ町の特色を活かす。（例えば国分寺、永沼邸など古い歴史と文化）
- ・3本の矢は折れない（バラバラではだめだ）
- ・自動車を走らせるには、素晴らしいひとつひとつ部品を組立て、素晴らしい車を作ること、素晴らしい走りをする。オーケストラも同じである。
- ・いかに全体設計をするかが重要である。
- ・そのためにも「交流・販売・環境」が基本であり、コンセンサス作りを行う必要がある。
- ・そのためは、新しい組織を作る。

仮称「新たなみやこ町を考える会」

組織の構成は、行政、商工会、JA、森林組合、直売所、地域住民（年代別）
- ・新しい組織の行動指針は「人・物・情報」である。

「人」関連

- ・縦割りではなく横割りの組織を持つこと。

例) 南信州観光公社、おじかアイランドツーリズム協会、喜多方グリーン・ツーリズムサポートセンター等は窓口が一本化している。

※「交流」を戦略的に捉えているところはこのような組織を持っている。
- ・新しい人材育成

コーディネーター（つなぐ人）・インストラクター（指導者）・ガイド（説明者）

多様なリーダーを育成する必要がある。

「物」関連

- ・新しい交流の場作り

地域資源を探す、ふれあいの場、学ぶ場を作り、地域資源を都市の人に売る。

都会の人は孤独であり、家庭に飢えている。

（財）都市農山漁村交流活性化機構では、都市との交流（グリーン・ツーリズム）を主に、「お母さんの宿に泊まる」「ふるさと子ども夢学校」「市町村長と語る旅」の事業を行っている。
- ・地域資源の活用

「宝探し」をやって欲しい。みやこ町の地図に地元の人が中心になって、お薦めの

物を落して欲しい（マッピング）

- ・交流ビジネスの展開

例；葉わさびを「マルシェ・ジャポン」「ぐるなび」を利用して直接消費者に届ける、
または直売所に隣接した田舎レストランで、消費者に食べてもらうなど。

「情報」関連

- ・情報拠点を作る

I Tの活用、メディアの活用（マスコミを利用する。）（地方のニュースを都会の人は待っている。）

田舎でもファッション性、デザイン力が必要となる。

参考図書に、著者 金子弘美氏の「田舎力」（ヒト・夢・カネが集まる5つの法則）

『5つの法則』とは、発見力、ものづくり力、ブランドデザイン力、食文化力、環境力で、具体的な事例が多く紹介されている。

次回のアドバイザーのテーマを「みやこ町の宝さがし」として座談会を行いたい。

座談会参集メンバーは、行政、教育委員会、商工会、J A、森林組合、直売所、地域住民（年代別）でみやこ町の共通認識作り出したい。

【例】

- ・ ワークショップ→資源発掘（足元の物をさがす）
- ・ 間伐後の山菜作り→山菜テキスト（調味料も地元の物）→山菜カレンダー（旬の山菜）
農業と林業の育成につながるなど。
- ・ 森林公園はどんなテーマで施設を作り、管理をするかなど。

3. 平成21年度アドバイザー派遣制度（第2回派遣）

◆（地元との意見交換会）

日 時：平成22年1月28日（木） 19:00～21:00

場 所：みやこ町本庁 中央公民館

内 容：「地域の宝探し」について

出席者：齋藤章一アドバイザー（(財)都市農村漁村交流活性化機構 専務理事）

【国土交通省】

鵜飼宣行（国土交通省 水資源地域対策課 計画係長）

【みやこ町】

中村紘一（副町長）久保良美（総務課長）村上重範（企画調整課長）

吉永秀信（財政課長）山下茂治（農政課長）荒巻典親（犀川総合窓口課長）

川上茂昭（教育委員会生涯学習課長）奥田和明（伊良原ダム対策課長）

山口邦生（伊良原ダム対策課参事）立花博美（伊良原ダム対策課長補佐）

【福岡県】

井上幸春（福岡県議会議員）

武末保彦（水資源対策課長補佐）灘波英次（水資源対策課振興係長）

岡崎陽好（水資源対策課主任技師）

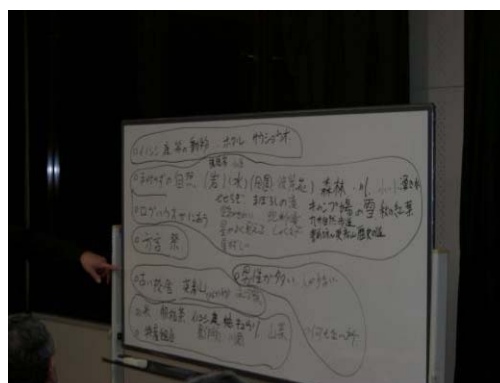
【関係者】

みやこ町商工会、福岡みやこ農業協同組合、京都森林組合、

よってこ四季犀館（直売所）

【地域住民】

下伊良原区長、上伊良原区長、扇谷区長、帆柱区長、ほか14名



□会議内容

【鵜飼係長】地域の活性化に向けた取り組み

- ・10月末に齋藤アドバイザーとみやこ町、伊良原地区を見て回った。
- ・この地域は、多くの宝が眠っていると感じました。

- ・そのため、この地域の活性化の核となる、地域の宝を皆さんと探したい。
- ・宝とは物だけでなく、景色もある。
- ・紙を配るので、地域の資源や地域の宝を書き出していただきたい。
- ・それを、どう使っていくかを齋藤アドバイザーにアドバイスしてもらおう。

< 15分間の作業 >

【齋藤アドバイザー】

- ・みやこ町はいろいろな資源に恵まれている。歴史も古く、自然も豊かであり、いろいろな産業に対応可能であると感じた。
- ・いまから、この地域の活性化を図る上で、活性化の核となる地域の宝を探すべく、今回、皆さんに「宝探し」を行っていただいた。
- ・今、時代は大きく変化している。私は、多くの農村・漁村を見て回ったが、確実に新しい時代に入った。演劇に例えれば、舞台が変わるという。
- ・今までの舞台ではなく、これからは新しい舞台でドラマが演じられる。
- ・是非、みやこ町が新しい発展を図るために、舞台を変えてドラマを変えることをして欲しい。
- ・地域資源には、自然、食、匠の技、歴史的・文化遺産、人材等がある。
- ・この資源を今までどおり使って発展を期待できるのかを考えて欲しい。
- ・現在我々を取巻く環境は、以前と比べると変わった。
- ・日本の食料自給率は41%であり、半分以上を外国に頼っている。
- ・今までは、工業や商業等の産業が発展すれば、お金が稼げるので、いくらでも外国から食料を輸入できると思い込んでいた。
- ・しかし、今の地球上にはそれだけの余力がなくなってきているので、お金があっても、食料を買えない時代がくるのではないかと怯えている。
- ・今の地球は大きな問題を抱えており、そのひとつが地球温暖化である。
- ・地球温暖化による気温上昇により、南極の氷が解けて海面が上がっている。その他には、石油問題もあり、石油は限りある資源であるため、いつかは枯渇する。
- ・そういうことを考えると、この地域は太陽エネルギーを受けた水と土と緑のように発展できる資源に恵まれている。
- ・以上のことから、地域活性化に向けて言えることは、「舞台も変わる」、「小道具も変わる」、「役者も変わる」、「演技の仕方も変わる」ため、新しい目で地域の資源を見直し活性化に向けた方向性を見出して欲しい。
- ・今ここで行った「宝探し」だけで終わってはいけない。「宝探し」は活性化に向けた通過地点でしかない。
- ・この「宝」を地域の発展にどう活かしていくかを、地域で考えなくてはならない。

- ・「宝」の活かし方を考えていく中で、3つポイントがある。
- ・一つ目は、オンリー1であり、みやこ町ならではのものを探して、全国あるいは世界に発信していく。
- ・「宝」をいろいろなメディアを使って宣伝し、「みやこ町に来れば、こういうものがあります」等といった、みやこ町が恵まれていることを対外的にアピールする。
- ・都会の人にどれだけ知られるかが、これからのみやこ町の力になる。

「食の問題について」

- ・地域の強みはいろいろな作物を組み合わせる料理として食べる、「地産地消」「医食同源」である。
- ・あらゆる世界の食文化を時間的に遡っていくと必ず家庭の台所に行き着く。
- ・イタリア料理、フランス料理、中華料理も全ての食文化の原点は家庭の台所から生まれた。
- ・その地域の野菜や食材等を、組み合わせる作っていくのが食の力であり、魅力でもある。
- ・まず、この地域の食材で作る料理をまとめた、「食のカレンダー」を作成する。
- ・カレンダーは、1 / 1 から 1 2 / 3 1 まで1日3食、この地域にある食材で何ができるかを考えれば、何の食材が不足しているかがわかる。
- ・「宝探し」は、今有る物を探すものと、無い物を探すことが大事である。
- ・何がないのか、どんな野菜を作ればいいのかを考える。
- ・これが、新しい農業の形である。
- ・今まで見過ごされてきたところに目を向ける。
- ・これが、新しいみやこ町のあり方である。

「交流について」

- ・交流なくして地域の発展はない。
- ・交流は、外から人が来て、いろいろとふれあい、経済的には地域でお金を使っていく。
- ・今は、世界中で交流を盛んにしようとしている。
- ・いかに都会の人達に地方に来てもらうかが、世界共通の関心事である。
- ・今までの観光は、観光資源、有名な文化遺産や世界遺産が皆をひきつけると考えられていたが、観光は今、曲がり角にあり、発地型の旅行から着地型の旅行に変わりつつある。
- ・今は農村の景観、食、祭、ふれあい等に関心を持つ人が増えてきている。
- ・地域に何も無いと思っていたら、それが実は大変な魅力になっている。
- ・北海道のオホーツク近辺で大草原をひとりじめというプロジェクトが始まった。
- ・広大な農地を持っている農家では、雪が降ると雪一色となって、農作業ができなくて

困っていたが、ある人がその農地をひとりじめにして、雪だるまや雪合戦等をして自由にお使いくださいというプロジェクトを始めたら大人気となった。

- ・地元の方は驚きである。
- ・資源を一つの目（地元住民）で見るとはならず、二つの目（地元住民、都市住民）で地域の隠れた資源の価値を見出す必要がある。
- ・さらに言えば、これから国際化が進んでいく。
- ・みやこ町にもこれからたくさん外国の方が来ることになる。
- ・外国の方の目線は、日本人が見落としているような日本の良さを発見してくれることもある。
- ・そこで、三つの目（地元住民、都市住民、外国の方）で地域を見て、「宝探し」をやるのが、交流を促進する上で非常に重要なことである。
- ・それと、ある種のコラボレーションが必要になってくる。
- ・「片品村」に横浜出身の若い女性がいます。
- ・「片品村」に来る前は、都会のアクセサリ店にいたが、体調不良になり、治療を目的に「片品村」に移住した。
- ・女性が、地元の方がポケットに炭を入れているのを見て理由を聞いたところ、身体や心臓に良いと言われた。そこで、彼女は炭を利用してネックレスやペンダントを作った。
- ・都会の人と地元の人との共同作業により、すばらしいものができる。
- ・交流を促進するという事は、単に人に来てもらうことだけでなく、来てもらったことによってふれあいがあり、信頼感が増えて何か一緒にやろうじゃないかとなる。
- ・これからの田舎の旅は今までとは違う。発想も内容も今までとは違う事がわかった。

「今からの旅について」

- ・今のグリーン・ツーリズムの旅は、「点」でしか楽しめていない。
- ・直売所で買うだけ、農家民宿で泊まるだけ、農家レストランで食べるだけ等豪華主義になっているが、これからは泊まって、買って、食べて、丸ごと地域の良さを楽しんでもらいたいと思っている。
- ・グリーン・ツーリズムは、ヨーロッパから導入したが、ヨーロッパと違う所は日本は一人勝ちではなく、皆が参加して皆の利益につながるようなグリーン・ツーリズムじゃないといけないと感じている。
- ・そういう意味で、みやこ町はいろいろな人に利益がもたらされるような「旅」を作りたいと思っている。
- ・そのためには、「宝探し」が必要となる。

「まとめ」

- ・「宝探し」の次の段階は、「宝」を地域活性化に繋げる戦略づくりである。
- ・まず、きちんと「宝探し」をして、この「宝」を磨いて「これがみやこ町ならではのものですよ（オンリー1）」と全国、世界に発信して欲しい。
- ・大きな時代の転換期において、「何もない」ことが実はチャンスであるということがだんだん認識されるような時代になってきた。
- ・新しく地域を発展させようと思ったら「宝探し」は必ずしなければならない。
- ・つまり、「宝探し」というのは今までとは違った目でもう一度、地域を、故郷を見つめる作業で、町民一人一人全ての人達を巻き込んでやらなければならない。
- ・今までの日本は戦後、高度成長期で大きく地域経済を拡大させ、縦割りで細分化されていた。
- ・成長期はそれで良かったが、今のように成長も止まり、環境やエネルギーの制約や条件ができると自由がない。
- ・少ないもので何かをやる時は、 $1 + 1 = 2$ ではいけない。 $1 + 1 = 3$ とか4にもなるような利益を生むことを考えない限り、地域の発展は難しい。
- ・今までは縦割りでやってきたが、今からは三本の矢である。一本一本では折れる。
- ・21世紀は発想を変えて $1 + 1 = 3$ でも4になることを考えないといけない。
- ・地域は可能性を持っているが、それが十分に活かされているのか、それを見つめ直さないといけない。
- ・三本の矢が折れないことを自動車に例えると、部品だけを集めても部品（エンジン）だけでは走れない。
- ・自動車は部品を集めて組み合わせてやっと走るのである。
- ・走れば人を運び、産業、生活、レジャーにも役立つようになる。
- ・縦割りにより、それぞれバラバラにやっている限り、いくらエンジンやタイヤがあっても走らない。
- ・協力体制を作らないといけない。
- ・もう一つ、オーケストラに例えるとバイオリン、チェロ、クラリネット等の楽器は、一つ一つの音がオーケストラで組み合わせられると新しい音が造られる。
- ・個人の方では造れない音が、みんなで協力するとすばらしいものになる。
- ・ここでポイントが一つあり、指揮者がいて全体を見て組み合わせを考えて実行する人がいないといけない。
- ・以上の3つのイメージが必要であり、このイメージで横断的な組織を作ることが必要である。
- ・織物であれば横糸を通す作業をしないとけない。
- ・横糸を通すと糸が布になる。
- ・布になったら今度は着物や洋服にしないとけない。

- ・さらにデザインを加え、ファッションとして付加価値を付けなくてはならない。
- ・まずは横糸を通す。
- ・横糸を通さないと着物や洋服はできない。
- ・横断的な組織を作っていただきたい。都市と橋を架けて交流する組織を作っていただきたい。それがスタートラインである。

◇地元住民からの意見等

- ・人が何度も来てくれるものを探していたところ、「権現様」というお社があった。多くの人がお参りにきてくれるように宣伝している。
- ・50年以上、山林を育てている。電柱より大きな木が1本500円である。ほおづきを小倉にだすと1本250円～300円、ほおづき2本と50年の材木が同じ値段である。なんとも情けない話である。
- ・伊良原は何か新しいことを開発しないといけないということで現在、わさびを作っている。山一杯にできており、伊良原の特産にしようとして作っている。
- ・昨年10月中頃「おらが町に来て見てギャラリー」を行った。帆柱には2日間で庄屋の家に600人集客があった。
茶菓子にだした「漬物」が評判となり、2日目に売ってみたところ、あっという間に売れてしまった。田舎の人は当たり前で食べているのが、都会の人には珍しい。これこそが「宝」であり、町おこし、村おこしになるのではないか。
- ・地域のために祓川（はらいがわ）の水を直接何かに利用できないかを考えた結果、水車を利用した小水力発電はどうかと思っている。水の流量的には少ないかもしれないが、落差があればエネルギーが起これると思う。小水力発電が実現すれば伊良原や帆柱の細い道にも対応できる電気カーや街灯・防犯灯、また、シカ・イノシシ等の害獣除けの電気柵にも利用できる。
水車は経済性が重要で、環境PRや観光PRだけでは行き詰ると聞いている。
売電収入や電気料金の削減等維持管理が考えられるような水車を造ればよいと思っている。
- ・伊良原には未婚の男性が多い。出会いの場を設けているが、なかなか結びつきが難しい。
- ・みんなが何かをやろうとしているが、岩屋河内では70代後半や80代の人ばかりなので厳しい。
- ・男が料理を作って食事をする会を5回程行った。レシピを作り、おいしく食べている。人が集まる場としては好評を得ている。
- ・「しし鍋」「しし汁」「里芋カレー」「シカカレー」等いろいろな料理を考えている。
- ・蛇淵のキャンプ場は「家族」をターゲットにしている。NTTの基地局が遠いので、ADSLもままならず、未だISDNを使っている。光回線等民間に対してもインフラ

の解放を考えて欲しい。泊まった人がブログにアップすることが簡単にできたらいいと思う。

- ・蛇淵のキャンプ場にアーティストを呼んで歌わせたい。
- ・地酒は取れる所で飲むのが一番おいしいという話を聞いたことがある。
犀川には林酒造という造り酒屋がある。この酒屋さんと何か連携できないかと考え、きゅうりで作る焼酎やリキュールを考えたりしている。
- ・地域の具材をもとにしたおにぎりの店を開こうとしている。地域の奥さんにいろいろ提案してもらい、4月にオープン予定である。
- ・木炭を焼いて12, 3年になる。売れ行きはいいが、材料がない。
木炭の利益を上げる方法があれば教えて欲しい。
- ・都会の人の暮らしが贅沢すぎるのではないかと思う。衣・食・住に田舎の人が合わせるようにすべきか、都会の人が田舎に来てもらった方が良いのか。都会の人の考えはどうなのか？
- ・伊良原は非常に魅力的だと思っている。車ですぐ来られる場所なのに、毎回、新しい発見ができる。環境に関しての魅力はわかりやすいが、「食文化」に対してはもっと関心をもってもらう必要があると思う。
食品・農産物等に対して何か違ったやり方でのきっかけ作りが必要ではないか。
キャンプ場に食材を買って行くのもいいが、地元の物を提供したりするのもいいと思う。
- ・伊良原の老人会には214、5人登録されている。そのうち、女が6割、男が4割。
働ける人は少ない。
各区の区長達がいるので、今後の伊良原をどういうふうに取り組むかの座談会を開いてはどうか、提案したい。
- ・伊良原の自然を生かした森林公園を作る予定である。いろいろ検討した中で森林公園を自然学校みたいな形にしてはどうかと考えている。伊良原の自然環境はやり方によっては、レイチェルカーソンのセンスオブワンダーのような情報発信ができそうな気がする。他の森林公園と同じものを造っても意味がないので、大仏様を据えてはどうかとの話もでている。多くの人に大仏様をお参りに来てもらい、交流の場そして情報発信基地にしていきたい。
- ・帆柱の水を売ってはどうか？外から人が来た時は、みやこ町のおみやげとして、水と竹炭を渡している。四季菜館で帆柱の水を売っていいのではないかな。

4. 平成21年度アドバイザー派遣制度（第3回派遣）

◆（アドバイザー報告会）

日 時：平成22年3月14日（日）

場 所：ふるさと会館（みやこ町犀川上伊良原）

内 容：水源地域対策アドバイザー報告会

出席者：齋藤章一アドバイザー（（財）都市農村漁村交流活性化機構 専務理事）

【国土交通省】

鵜飼宣行（国土交通省 水源地域対策課 計画係長）

【みやこ町】

奥田和明（伊良原ダム対策課長）、山口邦夫（伊良原ダム対策課参事）

立花博美（伊良原ダム対策課長補佐）

【福岡県】

井上幸春（福岡県議会議員）

武末保彦（水資源対策課長補佐）、灘波英次（水資源対策課振興係長）

岡崎陽好（水資源対策課振興係主任技師）

【関係者】

京都森林組合

【地域住民】

下伊良原区長、上伊良原区長、扇谷区長、帆柱区長、ほか47名



□会議内容

齋藤アドバイザー

○ アドバイザー報告

【第1回派遣】

- ・ みやこ町のいろいろな施設等を視察したが、この町には豊富な資源があると感じた。
- ・ しかし、この資源がまだ利用されていないと感じたし、ひとつひとつがバラバラで連

携していないとも感じた。

- ・ 今の世の中は大きな変化の時期であり、この資源を再評価し、新しい時代にどのように使っていくかを問われている時代でもある。
- ・ この大きな時代の変化の中で、新しい資源を掘り起こし、新しい地域政策を考える必要があると思う。
- ・ 古い時代が終わり、新しい時代が始まっているが、それは同時に時代の「光と影」を作っている。
- ・ 特に日本は、みやこ町を含め「少子高齢化」、「後継者不足」といった大きな試練に立っているわけであり、もう一方で、食料問題がある。
- ・ 食料問題では、今はお金があれば食料が手に入るが、お金があっても手に入らない時代になりつつあり、今や中国や韓国は外国に農地を確保する政策（ランドラッシュ）を取っている。
- ・ こういったことから、これからはお金があっても食料が手に入らない時代になっていくと思われる。
- ・ エネルギーについても、石油等は限りある資源であるため、いずれは枯渇するだろうし、地球温暖化対策で CO2 を削減しなくてはならない時代でもあるが、見方を変えれば「この地域にとってのチャンス」でもある。
- ・ 特に食料問題は、この地域の核になる重要なポイントだと思う。
- ・ また、都市部の団塊世代のジュニア等の若い人達が田舎に目を向けてきているが、田舎には雇用の場が無いため、地域としての対応力を問われている。
- ・ みやこ町としての特色を出して「オンリー1」を目指すことが大事だと考える。
- ・ 新しい時代に向け、みやこ町全体で新しい戦略を考え全体設計を立てることが必要と考える。
- ・ 全体設計をする中でのポイントは、「人」、「物」、「情報」である。
- ・ 「人」縦割りの組織ではない、横糸を通すような横割りの組織
- ・ 「人」今までの人材の外に、新たな人材の開発・育成
- ・ 「物」都市部の人々と田舎との新たな交流の場作り
- ・ 「物」地域資源の発掘・開発
- ・ 「物」農産物直売所、農家レストラン、農家民宿などの交流ビジネス
- ・ 「情報」IT の活用

【第2回派遣】

- ・ 現地調査でこの地域には多くの「宝」があると感じたので、第2回派遣の意見交換会では「地域の宝探し」をしていただいた。
- ・ その中で「動物」、「自然」、「文化」、「建物」、「食べ物」などの宝が見付かった。
- ・ 「夜の暗闇」は特にすばらしくて、都市部に住んでいる人達は、本当の暗闇を知らない

い。こういったものを表に出していくことが大切である。

- ・ この「宝」を磨いて、どのように表に出していくのかを今後考える必要がある。
- ・ 基本的な考え方としては
 - ① 時代の流れを読んだ新しい目線での活性化
 - ② 地理、歴史的な有利性を再検証し、「オンリー1」を目指す
 - ③ まずは組織づくりが必要
- ・ 自動車は、部品ひとつひとつを組み合わせで動く。
- ・ 地域がバラバラでは、地域の活性化はできない。地域が一丸となることが大切である。
- ・ オーケストラでも例えられる。オーケストラは、各楽器の音色を導く指揮者がいて、ひとつの音楽を奏でることができる。
- ・ この組織と指揮者となるコーディネーターがいれば、この地域も新しい可能性が開けていくのではないかと思う。
- ・ その他にも、出席者からいろいろな意見を頂いたが、新しい動きがあると感じた。
- ・ たとえば古いものを見直すと言う事で、「権現様」が意見としてでた。これは、古いものを再評価する新しい動きと感じた。
- ・ 食の世界でも「葉わさび」を作ってみようといったチャレンジが始まった。
- ・ 「葉わさび」も新たな産業としての可能性を含んでいるものである。
- ・ 「おらが町に来て見てギャラリー」等の交流も始まったし、伝統的な「漬物」もある。
- ・ 井上県議からお話があったが、エネルギーも大きな問題となっており、地域が持っている「力」をエネルギー問題に対応していこうといった事で各地で動き出しているところである。
- ・ 水車による小水力発電の意見もあったが、生み出された電気をエネルギーとしてどのように活用していくのか、また、水車を観光資源としてどのように地域の活性化に繋げていくのか、いろいろなアイデアがこれからの地域の発展に繋がると思う。
- ・ これからは「料理」も大きなポイントとなると思う。今までは規模拡大を目指した生産性向上をメインにやってきたが、食材を活かしていくのには料理が一番付加価値が付く。
- ・ これからは「食」と「農」を戦略として、「料理」が非常に重要であり、そういった動きがあることは、非常に頼もしい事だと思う。
- ・ 蛇淵キャンプ場の活用についても食育や、ブログの活用、アーティストを呼ぶ等新しい発想も素晴らしいと思う。
- ・ 地酒も造ったところで飲むことが一番美味しいと思う。こういった「アルコール作戦」も良いことだと思う。
- ・ 地産地消など地域で取れた食材を活用した対応も今後の大きな流れになると思う。
- ・ 木炭も大きな素材であり、他の地域ではいろいろな動きがある。
- ・ 都会の人達は、農村漁村に非常に関心をもっており、私どもの「オーライ！ニッポン

会議」という会議の代表をしている養老先生が言われていたが、100匹の猫を感性でとらえれば100匹それぞれ違う猫になるわけであるが、概念でとらえると「猫」という一言で終わってしまい、個性を失う。

- ・ 感性を磨くためには、田舎に来なくてはならない。東京では同じ硬さで同じ寸法の階段しかなく、何も考えなくても行動できる場所であるため、あまり頭が働かなくなる。
- ・ そういった面でも都会の人は田舎に目を向けてきている。
- ・ 食文化は重要になってくる。これを核に付加価値をつけて情報発信を行うことがポイントになる。
- ・ 自然学校も時代のニーズに合わせ、他からの意見を吸い上げながら形にしていくことが最良と考える。
- ・ 水は地域の宝である。これは地域で大事に育てていくべきと考える。

【事例紹介】 都会の人達のみで、地域の可能性を見出す。

- ・ 片品村（手作り炭アクセサリ）
- ・ 北海道オホーツク（大雪原をひとりじめ）

【アドバイザーからの提言①】

- ・ みやこ町は豊富な資源がある
- ・ 舞台を変えて（古い時代から新しい時代へ）活性化を考える時期である
- ・ 宝探しが始まり、新たな動きも始まった
- ・ 今後の展開としては、横断的な組織で（横糸を通し）考えていくべきだ。
- ・ これからは資源が乏しい時代で、環境も制約がある時代であり、厳しい時代の中で生きていくためには、 $1 + 1 = 2$ といったやり方では生きていけない。 $1 + 1 = 5$ でも 10 にでもなるような方法を考えていかななくてはならない。
- ・ 例えば、「縦糸」に「横糸」を通せば「織物」になる、「織物」は「和服」にも「洋服」にもなる。さらに「デザイン」をすれば「ファッション」となる。こういったやり方をしなくてはならない。
- ・ まずは、発想の転換、舞台を変える、横断的な組織づくりをしなくてはならない。
- ・ また、地域内部をまとめ、都市と地域を繋ぐコーディネーターの育成もする必要がある。
- ・ みやこ町は交流の可能性は高いと感じる。今、南信州観光公社が交流の組織としてあるが、そういうところも参考にしながら、都会の人達がみやこ町に来て気軽に楽しめるような組織づくりを将来的に考えてもらったほうが良いと思う。
- ・ 具体的にこの「宝」を都市部の人達に知ってもらうためには、情報として知ってもらうだけではなく、体験して知ってもらうことが重要である。

- ・ インターネットを通じて、いろいろな情報は得られるが、現地に来て体験することは、来る人にとっても「宝」になる。
- ・ みやこ町の交流を盛んにするには、みやこ町を丸ごと知ってもらうような旅行商品を作って、継続的にやっていくことが大切である。
- ・ 私どもまちむら交流きこうもそういったことをやっているが、たとえば今のグリーン・ツーリズムは直売所で買うだけ、農家レストランで食べるだけ、農家民宿で泊まるだけといった、点でしかない。少なくとも農家レストランで食べて、農家民宿に泊まって、直売所でお土産を買うなどといった丸ごと楽しめるプランを作っていただきたい。
- ・ 「宝探し」を行っただけでは、宝の持ち腐れになるので、着地形旅行商品を作っていただきたい。

【アドバイザーからの提言②】

- ・ これからは食料問題が深刻化すると予想している。
- ・ この地域が持っている最大の力は農業であり、食材である。
- ・ そこにどのような戦略性を持たせるかだが、農産物直売所がすごく元気である。全国で農産物直売所は1万3千箇所あり、コンビニエンスストアのセブンイレブンより店舗が多いことになる。売り上げの総額は1兆円であるが、いまだに成長している。
- ・ 直売所がなぜ繁盛しているのかというと、食材が新鮮・完熟であるということである。
- ・ たとえば東京の直売所では、朝採り野菜を夕食で食べることは、まずありえない。完熟のトマトは直売所の人気商品である。一番人気があるのは、もぎたての「とうもろこし」で、採取して2時間以内であれば生で食べられる商品であるが、これは行列ができるほどの人気がある。
- ・ 食の安心安全の問題であるが、BSE問題で直売所の売り上げが急激に上がった。やはり消費者がいかに食の安心安全に興味を持っているかが分かる。
- ・ 環境問題では、CO₂が問題となっているが、一番のCO₂削減となるのは、地産地消である。海外から大型船で長い時間と、大量の石油を使って輸入するだけで大変多くのCO₂が発生する。地産地消は大きなCO₂削減となり環境問題対策にもなる。
- ・ 直売所を核にして、地域の活性化を行うのが私の考え方である。最近ではいろいろなところと繋がりができ、学校給食や農家レストラン、農家民宿に直売所から食材を供給するなどといった結びつきが増えた。
- ・ みやこ町にも素晴らしい直売所があるので、これを核にした地域活性化をしてはどうかと思う。
- ・ たとえば、大根や人参などの単品食材に付加価値をつけても市場価格の1.5倍の価格で売ることは極めて難しい。日本人は1食当たり約700gの食材を消費するが、単価は1食当たり300円～30,000円までである。これは料理し提供することに

よる付加価値である。そのため、地域の食材をなるべく加工品にしたり、料理して付加価値をつけることが非常に大事なことである。

- ・ 今からは、交流・物販・観光をセットとし、総合的な対策を考えていくべきと思う。特に人・物・情報はIT技術により繋がるものであるので、IT技術を活用して総合的な対策を考えることが、重要であり、特に枠組み（組織づくり）をまず初めに整備することが重要ではないかと考える。

■ 質疑応答

【住民（男性）】

- ・ 現状の宝を、地域の活性化に繋げるためには私たちは今何をすべきか？
- ・ 今悩んでいることは、「次世代にいかにつなぐか」であり、次世代につないでいくためには、何が必要か？

【齋藤アドバイザー】

- ・ この変化の時代に対応するためには、交流が重要である。交流によって外部からの目で物事を見てもらい、率直な意見をもらう。交流は利用者ニーズを知る良い機会であり、地域もそのニーズを基に再検証することで最良の地域活性化を図れる。
- ・ 北海道の「大雪原をひとりじめ」が良い例であり、都市との交流により分かった「宝」である。
- ・ このときに大事なのは、問題意識を持った交流を行うことである。

【住民（男性）】

- ・ 帆柱は「みやこ舞」がある、帆柱キャンプ場での交流の中で披露してはどうかと考えているがどうか？

【齋藤アドバイザー】

- ・ そういう踊りをきっかけとして、みやこ町を知ってもらう。例えば、食材を知ってもらうなど、他にもいろいろあるということを広めることが大事である。都市部の人達は、1つの物を求めて訪れることは少ないため、いろいろと連携してやってもらいたい。

【住民（女性）】

- ・ この地域は、バス路線などがいないため、町外の人が来たいと思っても、自動車がないと訪れることができない。
- ・ 交通の便が悪い（道路が狭い、ハード整備が遅れている）
- ・ 地域に住む人も困っている、乗り合いタクシーなどを地域内で作ってはどうか？

【齋藤アドバイザー】

- ・ ポイント毎のアクセス網を作ることも大事である。現状であれば、自動車が必要となると、交流単価が上がる。交流単価を下げるためにバス等の路線を設ける事が望ましいと思う。

【住民（男性）】

- ・ この地域の人が、「やる気を出すか」、「やる気を出さないか」が問題である。みんなで協力して何をしたいのか考えるべきだ。
- ・ 町に提案だが、帆柱、扇谷、上伊良原、下伊良原の4区長を集めて、地域振興に向けた会合の場を設けて欲しい。

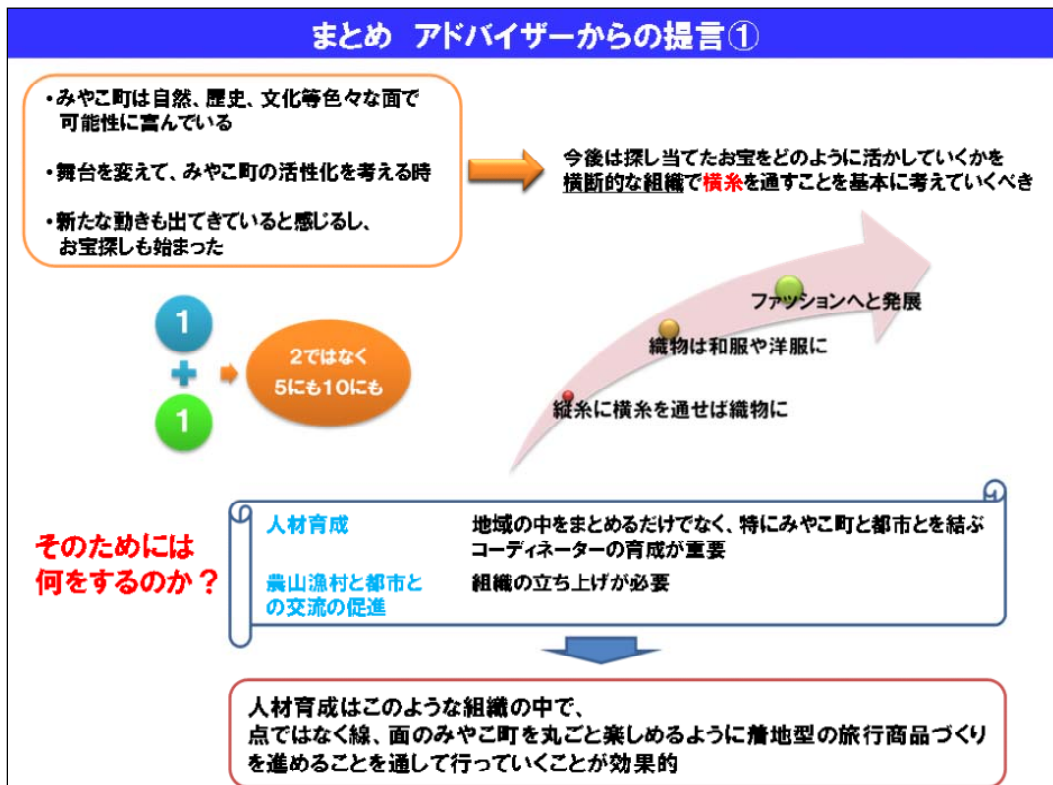
【住民（男性）】

- ・ 地域の宝さがしや交流が地域の活性化に繋がることは分かったが、第1歩が踏み出せない。齋藤先生は全国各地を回られているようですが、行政と地域がうまくいっている所を教えてください。

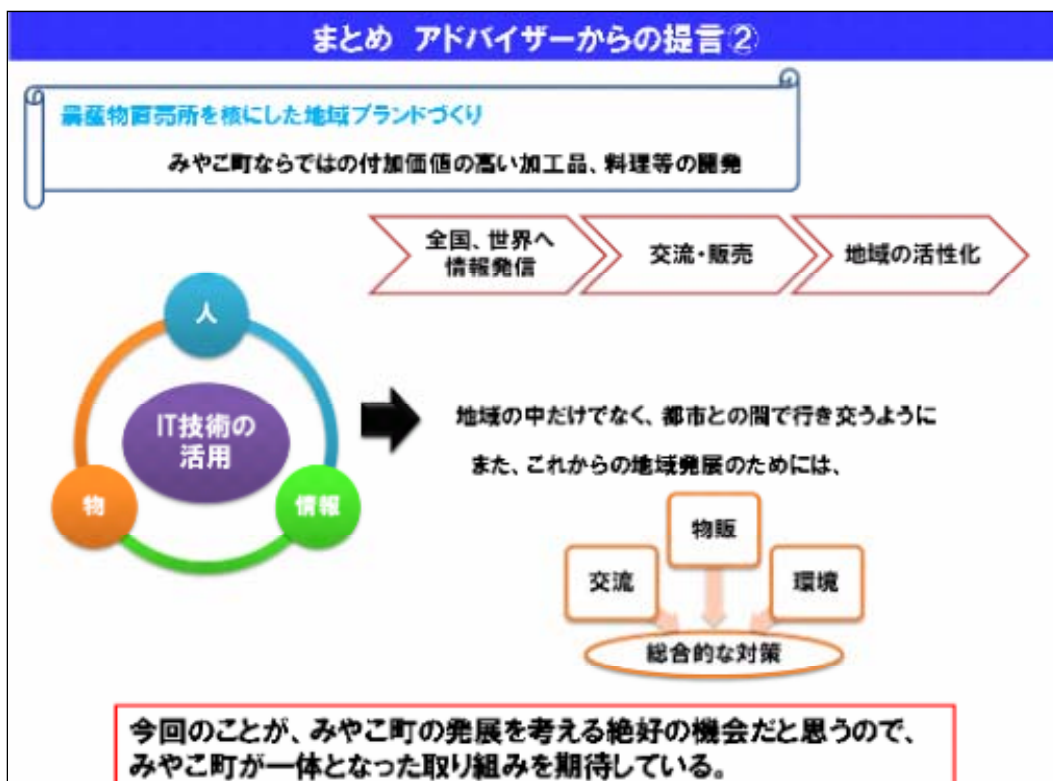
【齋藤アドバイザー】

- ・ 長野県飯田市は地域全体で組織を作って、都市部の観光客を獲得している。
- ・ この地域も、組織を作ることが重要と考えている。
- ・ これからは、高度成長期ではなく、低成長期になる。
- ・ また、歴史的にも人の意識が変化している（都会から人が田舎に戻りはじめた）これは、この地域にとっても良い機会であり、ダム建設により水特事業でハード整備もされる、この機会を利用し、地域の振興を図る。

◆提言 1



◆提言 2



◇事例 1

事例紹介 片品村 手作り炭アクセサリ




炭焼き歴70年！金次郎師匠の炭を使ったオリジナルの手作りアクセサリ。2週間に一度、炭の入れ替え作業をお手伝いしています。一度に3tの薪を10日間かけて高温で焼きます。炭になるのはわずか10分の1程度。

師匠の集まる勉強にて、内ポケットに炭を入れているおじいちゃんを発見！なぜ？と聞くと「炭には電磁波を吸収し、癒しを与える効果があると言われていたんだよ。だから心臓の近くに入れておくのさ。」

だったら！！とアクセサリショップ定員時代の経験を活かし、アクセサリを作りました。

試行錯誤を重ね、手や服につかない抜きを発見しました。すべて手作り一点ものなのです。炭は堅いものを選んでいますが、自然のものなので取り扱いには注意し、万が一壊れた場合はお直しいたします。



東京から移住の元コギャル
山崎三智子さん

出展: YOMIURI ONLINE
IRAKAH

◇事例 2

事例紹介 北海道オホーツク 大雪原をひとりじめ

雪原オホーツクシーニックハイウェイHP

雪原オホーツクシーニックハイウェイHP

大雪原をひとりじめ

誰の足跡もないマッサラな大雪原を、あなただけに！

知床・東オホーツクの1,000坪の雪原が1日使い放題

雪原の真ん中であなただけの真・自分世界を感じてください


予約受付期間: 2010年2月1日より受付中

予約電話: 0152-42-8214

予約URL: <http://www.parkside-hotel.com>

観光施設ではないので、たいしたおもてなしは出来ませんが、旅人の皆さんと、わたしたち東オホーツクの地元民が、寒い流水の季節に、暖かいふれあいのひと時をご一緒することを、心から楽しみにしています。

暑くなったら近くの農家などで一休み。暖かい部屋で、温かい飲み物などを用意して待っています。



「大雪原をひとりじめ」

2010年2月より

誰の足跡もないマッサラな大雪原を、あなただけに！

知床・東オホーツクの1,000坪の雪原が1日使い放題！

出展: 東オホーツクシーニックハイウェイHP

5. みやこ町の今後の方針

今後、縦割りの組織ではない、横系を通すような横割りの組織に、水源地域住民、商工会、農協、森林組合、直売所、社会福祉協議会、有識者、行政等でプロジェクトチームを結成し、活性化策の検討及び試験・試作・検証を行い、各分野での方向性を示すビジョンを策定し、自立的な地域活性化を目指したいと考えている。

平成 22 年度は、伊良原地域活性化プロジェクトチームを設置し、地域の問題抽出及び検証、活性化への方向性等の協議を行い、平成 23 年度に予定している、伊良原地域活性化ビジョン策定に向けての事業作業を行う予定である。